研究成果報告書 科学研究費助成事業

今和 5 年 6 月 2 9 日現在

機関番号: 34313 研究種目: 若手研究 研究期間: 2020~2022

課題番号: 20K20090

研究課題名(和文)「おもてなし」概念の再定義と経済的価値指標の構築 - 歴史史料からのアプローチー

研究課題名(英文) Redefinition of the concept "OMOTENASHI", Study of the economical value

研究代表者

酒匂 由紀子 (Sakawa, Yukiko)

花園大学・文学部・講師

研究者番号:40822771

交付決定額(研究期間全体):(直接経費) 600,000円

研究成果の概要(和文): 本研究は、日本中世後期の古記録を中心とした史料の分析から、日本の「おもてなし」の概念に対する解釈を実証的に解明し、現在の観光業への応用を目的としたものである。具体的には、昔の日本が「おもてなし」をどのように解釈し、実践していたのかということを歴史史料に即して検討した。本研究で解明できたのは、当時のもてなしの意味が御礼や労いを意味するものであったことである。さらに、もてなしの場には飲酒が伴うことも多かったことがわかった。他方、戦乱期など酒を提供できない状況の場合、酒の代がたままままます。 の意味があったと考えられる。

研究成果の学術的意義や社会的意義 新型コロナウィルス流行以前の京都をはじめとする観光地で問題視されていたのが、宿泊施設や観光施設での「おもてなし」と称する過剰サービス合戦だった。そうした「おもてなし」行為は、観光地において日本の伝統だと説明されていたという。一方で、研究における接遇の概念としての「おもてなし」の定義については、議論

「おもてなし」と称する週割リーに人言戦だった。でして、のってなし」「1河は、既たたによいて自分とはだと説明されていたという。一方で、研究における接遇の概念としての「おもてなし」の定義については、議論が深められていない状況にある。 本研究では、観光学やメディア、および観光地が有する「おもてなし」概念の解釈を歴史史料に即して再検討することができた。また、かつては「おもてなし」が銭に換算されていたことも確認できた。このことは、現在の「おもてなし」にも価格を付加する試みも可能であることに気付かされる。

研究成果の概要(英文): This study tried an elucidation of the interpretation for the concept of "the hospitality" of Japan. A method of the study that I performed is to analyze the historical materials including a diary and the official document of the Japanese Middle Ages. I intend to show that I can apply the findings to constitution. It is that a meaning of the hospitality at the time meant thanks and appreciation that I clarified in this study. On the other hand, the place of the service was often accompanied with drinking.

研究分野:日本中世史

キーワード: 観光 京都 日本中世 おもてなし 飲酒文化 酒肴 ふるまい 訪問者

1.研究開始当初の背景

研究開始当初の頃の日本は、オリンピックや万博を控えつつ、新型コロナウィルス流行前のオーバーツーリズムの状況にあったこともあり、インバウンド対策に目を向けられていた。しかし、接遇の概念である「おもてなし」の定義について、そうした状況のなかで議論が深められていなかった。そもそも、「おもてなし」とは、どのような行為を意味するものなのかという問題にも向き合ってきていなかった。

そうした「おもてなし」の語が日本の、とりわけ観光地における接遇方法の概念として使用されるようになったのは、2013年の五輪招致活動スピーチにて使用されたことが大きい。この招致活動の後に「おもてなし」は、対価を求めない心配りというような理解にて、観光学におけるサービスやホスピタリティの分野に位置づけられて研究対象として確立している。

さらに商学や工学などの分野も参画し、ここへメディアにおける議論も加わりながら、2015年には日本観光学会における大会で共通テーマに取り上げられるなど、学際的な研究対象として活気をみせているといえる。

一方、一連の研究や議論を通覧すると、「おもてなし」に関して「グローバル化に対応したルールが無」く、無料奉仕を「企業や地域に押しつけ」ているという評価が存在している(「対談: これからの日本の観光研究に求められていることとは?」(『ADSTUDIES』59号、2017年))。このことからして、「おもてなし」は、問題のある概念となっていることが明瞭である。

こうした研究や議論において気に掛かるのは、歴史学からの意見が不足していることである。歴史史料を利用した研究については、花岡拓郎(2015)の成果が存在するものの、「おもてなし」行為の根拠にしばしば引用される茶道や華道が発達した中世後期については触れられていない。他方、歴史学のうち日本史分野においては、饗応や接遇に関する研究の蓄積がある。例えば、室町幕府の将軍をもてなす「御成」については、二木謙一(1985)などの有名な論考をはじめとして、為政者による宴会について論じた桜井英治(2017)の研究のほか、実証研究の手法を用いた浜口誠至(2012)の研究もある。また、伊勢神宮参詣などの旅人を村落がもてなしたとされる「坂迎」については、佐藤和彦(1977)の研究成果が知られており、この行為が日本文化の一つであったと位置づけられている。

しかし、現在の日本史分野における研究成果は、「御成」の事例があくまでも政治史を補強すべく取り上げられてきたことや、「坂迎」が最近では殆どその手法が用いられなくなったマルクス主義歴史学の成果であるため、先述した「おもてなし」の概念の解釈を問い直す答えとしてすぐさま応用できない状況にある。したがって、「おもてなし」とは何かという問いに答えることのできる研究や議論が喫緊に必要な状況であるといえる。

参考文献

花岡拓郎「「おもてなし」を史料から考え直す」(『第77回全国都市問題会議文献集』2015年) 二木謙一『中世武家儀礼の研究』(吉川弘文館、1985年) 桜井英治「宴会と権力」(『交換・権力・文化:ひとつの日本中世社会論』みすず書房、2017年) 浜口誠至「戦国期の大名邸御成と在京大名」(『戦国・織豊期の西国社会』日本史史料研究会 2012年) 佐藤和彦「中世荘園における領主支配と荘民生活」(『中世社会思想史の試み』校倉書房、初出1977年)

2 . 研究の目的

本研究は、「おもてなし」を歴史史料に即して意味を捉え直し、観光学やメディア、および観光地が有する概念の解釈を再検討することと、「おもてなし」行為の経済的価値の提議を目的とするものである。

本研究の目的は、日本中世後期の古記録を中心とした史料の分析から、日本の「おもてなし」の概念に対する解釈を実証的に解明することである。具体的には、昔の日本が「おもてなし」をどのように解釈し、実践していたのかということを歴史史料と当時の社会構造に即して日本文化発祥の地とされる京都を中心に検討する。その結果を以て、かかる研究や議論、そして観光地へ「おもてなし」の概念に対する解釈の見直しを提唱していく基盤を構築する。

3.研究の方法

本研究は、「おもてなし」の解釈について歴史史料を根拠に捉え直し、その結果を学会やメディア、そして観光地へ問題提議するための基礎研究構築を目標に据えた。その目標に即して分析対象とする歴史史料は、主に信憑性の高い古記録を用いた。

その古記録とは、既に翻刻されて刊本になっている公家日記のみならず、これまでの中世後期研究であまり使用されてこなかった宮内庁書陵部・内閣文庫・国立歴史民俗博物館に所蔵されている未翻刻の日記も分析対象とすることに本研究の特徴がある。収集する記事の年代は、職人・商人による京都文化が発展したとされる室町時代~戦国時代とした。

4. 研究成果

(1)「もてなし」・「ふるまい」の解釈

中世後期の「もてなし」の解釈を検討するにつき、室町期から戦国期初期にかけて使用されてきたのは「もてなし」の語よりも「ふるまい」の語であったことが注意される。これについて、戦国期にイエズス会の宣教師が編纂したポルトガル語-日本語の辞書である『日葡辞書』には、「もてなし」を「人を招いて抹茶をたててもてなすこと」と解説されており、また、「ふるまい」について「招宴」や「宴会を催す、あるいはご馳走する」と説明されている。他方、先行研究は、「もてなし」と「ふるまい」を同義に捉えている。

よって、本研究では「ふるまい」の語に注目して検討を行った。また、検討対象の史料は、室町・戦国期を代表する青侍の記録である『山科家礼記』と、その主人である公家の山科言国が記した『言国卿記』を中心に用いた。その際、「ふるまい」を行う者と「ふるまい」を受ける相手の身分や、記主と両者の身分差に注意した。また、史料上では「ふるまい」のほか「ふるまう」「ふるまわれ候」を区別して使用していたことを確かめられたので、それぞれの解釈を検証した。まずは『山科家礼記』の検討を行った結果、「ふるまい」は、訪問者が訪問先の人々へ手土産の酒肴を馳走することを意味していたことが判明した。そこには、御礼や労いの意味が込められている事例もあった。これは、人を招くことを前提にしている『日葡辞書』の「もてなし」の茶道を例にした説明と相反するものであるといえる。他、「ふるまう」は手土産に酒肴のみならず、銭も含めていたことがわかり、「ふるまわれ候」は、記主や記主の身近な者が「ふるまい」を受けたことを意味していたことが明らかになった。

次に、『言国卿記』にて「フルマイ」と「フルマワレ」(史料上の表記に従い、カタカナで表記する)の検討を行った。山科言国は『山科家礼記』の記主らよりもボキャブラリーがあったということが現れているのか、『山科家礼記』における「ふるまい」の行為についても多種多様な表現を用いていることを見受けられる。そうした点に注意しつつ検討した結果、言国が示す「フルマイ」とは酒をおごる、もしくはおごってもらう意味で使用していたことが浮かび上がってきた。また、「フルマワレ」については、言国の妻や義弟による「フルマイ」の行為に、尊敬を意味する「らる」を付けた表現になっていたことがわかった。いずれにしろ、『言国卿記』における「フルマイ」は、酒をおごることを意味していたことがわかった。

したがって、「ふるまい」と「フルマイ」ともに酒や肴を用いて他人へ御礼や労いを表わしたり、喜ばせようとしたりしていることが共通する。それに加えて着目すべきは、既知の関係の間でしか使われていない語だということである。このことは、現在の「もてなし」が観光客や宿泊客といったこれまで関わりのなかった相手に対して使用されていることと相違するところであるう。

(2)「もてなし」・「ふるまい」の解釈の背景

飲酒の意義

(1)の研究を進めるにあたって「ふるまい」や「フルマイ」などに付随して頻出したのが酒であった。飲酒に関わってくる従来の研究といえば、宴会の研究の蓄積があげられよう。しかし、こうした研究に取り上げられる宴会は、集会する理由があったとしても、最後には酔っぱらうことこそ目的としていたのではないだろうか。

他方、宴会ではない場面での飲酒としては、報告者が以前に検討した節供行事がある。これは、 節日(人日・上巳・端午・七夕・重陽)の日に行われる行事である。以前、報告者は、祇園社を 例にこの行事を検討したところ、供物は執行の者によって用意され、撤饌された供物が執行の下 で勤務している者たちに分配されていたことを明らかにした。

注目すべきは、この時に執行から執行の配下の者らが撤饌として受け取るものに海松(虫下し)や銭といったもののほか、酒も含まれていたことである。しかもこの酒は、酔っ払う程の量は供与されていない。とすれば中世において、宴会の場で酔っぱらう以外の飲酒が存在したということになる。

以上のことを踏まえ、本研究では、室町・戦国期の京都において、宴会以外の酒がどのような 時に必要になってくるのかを検討した。また、酒を提供する意味についても考察した。

結果、訪問してきた使者に対して酒が提供されていたことが判明した。この使者への酒とは、公家や寺院のほか、室町幕府の将軍の使者であっても一律であった。また、使者としての任務を終えて戻ってきた者に対しても酒が出されていた。その他、年貢を納入してきた者に対しても酒が出されていた。この場合、年貢納入者を領地からの「使者」と表現されていることを確かめられたので、年貢納入者も使者として酒を受けていたと捉えられる。加えて、使者以外に訪問客の従者(供の者)や、大工、庭掃除の河原者にも酒が提供されていた。

したがって、室町・戦国期における宴会以外の酒の提供は、身分に関係なく訪問者や仕事を終えた者に対し、労いの意味を込めたものであったと考えられる。さながら、現代でいうところの客人に対する一杯の茶のようなものであったと考えられる。本研究によって、室町・戦国期の京都には、荘園領主である公家や寺社が集住していることもあり、その生活において常に酒の用意が必要であったといえる。

酒の流通

(1)の研究、および(2)- の研究において、室町・戦国期の京都において、酒の重要性が浮

かび上がってきた。そうした酒について、先行研究によって応永年間の京都には 300 軒以上の酒屋の存在が明らかにされている。また、応仁・文明の乱を契機に京都以外の酒が流入してきたともいわれている。

本研究では、引き続き公家の山科家の酒の入手方法と、将軍家の酒の入手方法について検討を行った。結果、応仁・文明の乱後の山科家は、青侍大沢久守とその被官らによって近江国大津の酒を購入していたことと、山科家の根本荘園である山科東荘で造酒された酒を購入していた。一方で、乱後の山科家は京都の酒を購入している証左がみえないことは注意される。

他方、応仁・文明の乱後の将軍家は、側近の公家衆や女房衆らによる輪番制によって酒が用意されていた。その酒は「奈良酒」や「河内酒」が殆どであった。おそらく公家衆らも山科家と同様に各々が京都以外の酒を入手するルートを持っていたことが予想される。将軍家の酒は、そうした側近衆や女房衆の家が持つ酒入手ルートに支えられていたといえる。

「酒屋・土倉」の社会的立場

史料や研究上でこの時代の「酒屋」は「土倉」と並列して扱われてきた。そうした、酒屋・土倉は、応仁・文明の乱前後の古文書・古記録に頻出する。彼らが史料上に取り上げられ場面として知られているのが、応仁・文明の乱前に土一揆によって襲撃されることである。そして酒屋・土倉らは、土一揆の襲撃に武装して対抗していく。この酒屋・土倉らによる土一揆への対抗について先行研究は、「町衆」としての行動の初期段階とみている。ちなみに「町衆」は、林屋辰三郎氏の研究により、室町幕府に抵抗する勢力だと捉えられてきた。

一方、以前に報告者は、この時代の室町幕府の史料上にみえる酒屋・土倉の実態が幕府の大名 (タイメイ:将軍の近くでその政治を支える重臣)被官の者が多いことを明らかにした。そうし た酒屋・土倉がどのような立場を全面に出して土一揆を迎撃していたのかという問題の解決を 試みるとともに、酒屋・土倉と幕府、将軍との関係について検討した。

結果、8 代将軍足利義政の執政時にはすでに、将軍によって酒屋・土倉らの土一揆迎撃がなされていたことがわかった。つまり、酒屋・土倉らは大名の被官でありつつも、将軍の下で編成されていた将軍の在京武力だったのである。また、酒屋・土倉のメンバーは将軍ごとに変化していたと考えられる。

この結果を踏まえて の研究を考慮するならば、義政期の酒屋の活動が幕府に関連するものを中心とするようになっていったことと、京都住民が京都で酒を入手しなくなることが連動していた可能性が考えられよう。

5 . 主な発表論文等

4.発表年 2021年

〔雑誌論文〕 計3件(うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件)		
1 . 著者名 酒匂由紀子	4.巻 714	
2.論文標題中世後期の「酒屋・土倉」と室町幕府	5 . 発行年 2022年	
3.雑誌名『日本史研究』	6.最初と最後の頁 33-58	
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有	
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著	
1.著者名 酒匂由紀子	4.巻 42	
2.論文標題 中世後期の京都社会における酒の消費-『山科家礼記』を中心に -	5 . 発行年 2022年	
3.雑誌名『花園史学』	6.最初と最後の頁 33-52	
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無	
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著	
	1	
1 . 著者名 酒匂由紀子 	4 . 巻 677	
2.論文標題 中世の「ふるまい」の意味についてー『山科家礼記』・『言国卿記』を中心に -	5 . 発行年 2022年	
3 . 雑誌名 『立命館文学』 	6 . 最初と最後の頁 226 - 238	
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無	
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著	
〔学会発表〕 計3件(うち招待講演 0件/うち国際学会 0件)		
1 . 発表者名 酒匂由紀子 		
2.発表標題「中世後期の「酒屋・土倉」と室町幕府」		
3.学会等名 日本史研究会大会共同研究報告		

1.発表者名 酒匂由紀子		
2.発表標題 「徳政と徳政令」		
3.学会等名 奈良歴史研究会		
4 . 発表年 2020年		
1.発表者名 酒匂由紀子		
2. 発表標題 「室町期京都の飲酒文化と応仁の乱」		
3 . 学会等名 花園大学史学会大会		
4 . 発表年 2022年		
〔図書〕 計0件		
〔産業財産権〕		
〔その他〕		
- 6 . 研究組織		
氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
7 . 科研費を使用して開催した国際研究	集会	
〔国際研究集会〕 計0件		
8.本研究に関連して実施した国際共同	研究の実施状況	

相手方研究機関

共同研究相手国